



### I-OWA マンスリー・セミナー講演より ウォール街の歴史(2)

講演： 岡本 和久  
レポーター： 赤堀 薫里

1914年に第一次世界大戦が勃発しました。モンロー主義の米国は、最初は静観していましたが、1917年に参戦し、だんだん米国が海外の出来事に巻き込まれるようになりました。

第一次世界大戦は、初めて戦車や潜水艦、飛行機、機関銃が使われるようになった戦争でした。1919年に終戦。ベルサイユ条約が締結され、ドイツが非常に厳しい処分を受けました。米国のウィルソン大統領は国際連盟の創設を提案しましたが、上院に拒否され、結局参加できませんでした。底流として米国の中に内向き思考が強まっていたのです。その意味ではちょっと今と似ている状況がありました。移民の制限があって、北欧の家系でプロテスタント、つまりWASPのみが純粋なアメリカ人であり、他は違うという意識が非常に高まった時期でした。

1920年代初頭は技術革新、繁栄の時代でもありました。トーマス・ウッドロー・ウィルソン大統領は民主党でした。まさにパリ講和条約でドイツに対して過酷な制裁を課しました。ウィルソンが提案した国際連盟の創設も上院は共和党が支配していたので否決されます。ウィルソンは失意のうちに亡くなっています。



このころ強く起ったのが、赤の恐怖。1917年レーニンが、ポリシェヴィキ政権を樹立させます。ソ連が力を強めてきていたため、米国がそれに対して危機感を持ち、赤狩りのようなことが非常に進んでいきます。異教徒の排斥。アフリカ系アメリカ人、カトリック教徒も排斥の対象でした。彼らはアメリカ人ではないとされたのです。戦争があって、忠誠心が鼓舞され国民の気持ちは高揚していました。そして、戦争が終わってそのはけ口がなくなり、やはり敵を作ろうとする世相が強まったのでしょう。1915年にKKKができたのも同じ理由だったようです。



## 長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ウィルソンの後に大統領になったのが、共和党のハーディングです。彼の時代に起こった大きな事は、国際軍縮会議です。主力艦隊の保有率が決まり、米英が5に対して、日本は3。フランスとイタリアは1.67。日本国民は非常に怒りましたが、臥薪嘗胆、これは受けなくてはいけないということで我慢しました。

ハーディングが亡くなり、次に大統領になったのがジョン・カルビン・クーリッジ・ジュニアです。1921年に第一次世界大戦後の絶望的な反動不況から景気が回復。このクーリッジの時代は非常に米国が良くなった時代です。自動車が普及する。ラジオが熱狂的な流行になってきました。米国が世界の銀行になります。金融の調停人となり、ドイツの救済をモルガンが仲介します。

「オンリー・イエスタデー」というアレンさんが書いた文庫本に大相場の頃の世相が生き生きと書いてあります。クーリッジが大統領の時、ビジネスはあまり好調ではなかったのですが、連邦準備委員会が公定歩合を4%から3.5%に下げたので、1924年からどんどん株が上がりだしました。一方で信用貸しはものすごく膨張しました。銘柄的にはものすごく絞られていました。出来高の1/3がGMだったともいわれます。US スティール、ラジオ(RCA)などの銘柄も買われました。買いの主体になっていたのがデュラン、フィッシャー、ラスコフ等の投機家集団でした。それに大衆が提灯をつけていきました。

連銀はこのトレンドには非常に困惑して公定歩合を1928年2月から4%に戻します。5月には4.5%。7月には5%と金利を上げていきます。株は乱高下を始めますが、基調的には上昇を続けていきます。この辺も日本の80年代のバブルとすごく似ています。日本でも89年12月にピークをつけましたが、その年の初めから公定歩合の引き上げがありました。それでも株価は上昇する。80年代に入ってから第2次オイルショックも乗り越えた。プラザ合意もブラックマンデーなどの悪材料をも乗り越え、最後、金利が上がっても大丈夫ということでバブルの仕上げに入ってしまった。バブルには共通点があり面白いです。

咆哮の20年代、アメリカでも乱高下の度に警戒をする人も出てきている。1928年に大統領選挙があり共和党のハーバート・フーバーが31代大統領になります。景気が非常に良い時でした。ピークが近づくと警戒する人たちも増えてきましたが、大衆は上昇を続けるマーケットに熱狂していました。

この後講演では、大相場の崩壊からの余波や、大不況と改革についての解説。また、その後回復して黄金時代を迎え、ブルマーケットの始まりについて説明くださいました。